

「儒教における生と死」 解題

小島 毅

わたしたちの二一世紀COEプログラム「死生学の構築」では、二〇〇五年四月二三日に東京大学医学部鉄門講堂を会場としてシンポジウム「儒教における生と死」を開催した。以下に掲載する三本の論攷は、そこで口頭で報告された研究発表にもとづくものである。以下、その経緯を紹介したい。

「死生学の構築」は二〇〇四年に文部科学省による中間評価を受けた。評価はおおむね好意的であったが、ただ一点、東アジアの死生観に対して今後きちんと取り組むようにとの指摘がなされた。このことは、COEを運営してきた側でもそれ以前から内発的に実感されてきたことであった。そこで東京大学大学院人文社会系

研究科にCOE特任教授として杜維明博士を迎え、日本滞在中にさまざまな形で交流を図り、東アジアの死生学についての共同研究を企画したのである。

杜氏は英語表記でTu Weiming、現在ハーバード大学ハーバード・エンチン研究所の所長職にある。エンチン (Yenching) は漢字表記すれば「燕京」で北京市の雅称であり、かつてその地にあったキリスト教系私立大学の名称であった。ハーバード大学と燕京大学とが協同して中国文化研究のために北京（中華民国の当時の正式名称では「北平」）に創設したのが「ハーバード・エンチン研究所」であるが、一九四九年の「解放」後、燕京大学は政府に接収され北京大学に統合された。ハーバード・エンチン研究所はハーバード大学構内に移り、今日に至っている。

杜氏自身も、中国史の激動の波に揉まれた世代に属する。氏は「抗日戦争」中の一九四〇年に中国大陸で生まれたが、国共内戦後は台湾で育ち、大学卒業後に米国に留学、そのままそこで学位や職を得て、現在はアメリカ合衆国の市民として生活している。上述の所長職を務めるかたわら、各種学術会議の企画・運営、世界各地からの客員教授としての招聘（今回のわたしたちのCOEもその一つ）や、有識者として国連関係の委員も務め、東奔西走、席の温まる暇も無い多忙な日々を過ごしている。そうしたなかでの日程調整は難航し、二〇〇四年三月から四月にかけてという、年度をまたぐ異例の招聘事業となった。

杜氏の専門は中国思想、特に儒教哲学である。古いところでは孔子・孟子時代の儒家思想の実像解明を最新の考古学的成果を分析して論じ、中ほどでは朱子学・陽明学に対する思想史的研究を推進し、新しいところでは現代社会における儒家思想の役割を説くという、まことに幅広い活躍ぶりを示している。特に最後の点に関

しては、「現代新儒家」の代表的存在として、氏自身が研究対象にされてもいる。

杜氏の日本での日程については、すでに本COEのニューズレターに報告記が掲載されているので省略するが、一か月の滞在中に一〇回に及ぶ講演会・シンポジウムで演説するという超人ぶりだった。その締めくくりが、ここに紹介する「儒教における生と死」であった。

なぜ「死と生」ではなく「生と死」なのか？

筆者（小島）の個人的な思い出話から始めるのをお許しいただきたい。

今から七年前、さる出版社の倫理教科書の分担執筆箇所原稿で「生死観」という表現を使った。全体の編者を務める方から「ふつうは〈死生観〉というのではないか？」と指摘されて、はじめてその不自然さに気づいたのである。自省してみると、生を死の前に持ってきたのは、『論語』のなかに見える孔子の言葉（として伝えられてきた文言）、「いまだ生を知らず、いづくんぞ死を知らんや」に影響されたことであった。死の前には、われわれが現に生きているというその生がある。死についての考察は、まず生から始められねばならない。本誌『死生学研究』の名称に異を唱えるつもりはないけれども、儒教の立場からは「生死学研究 (Study of Life and Death)」であるべきことになろう。

シンポジウム企画の時点で、アメリカにいる杜氏と電子メールでの連絡を取った際に私が提案したテーマが Death and Life ではなく Life and Death in Confucianism であったのもそのためである。そして、杜氏からも

「儒教の立場としてはそうであろう」という同意をいただいた。

そこで、シンポジウムでは、まず杜氏に儒教の〈生〉の哲学について語っていただき、ついで小島が〈死〉を対象とした報告をする流れにした。そして、二人の報告に対して、まずは外部の視点から、次に内部の視点から、二人のコメンテーターを迎え、全体の司会進行は東アジアの儒教全般に通暁した研究者に委嘱しようということになった。こうして島菌進拠点リーダーとも協議した結果、コメンテーターに坂部恵・馬淵昌也両氏、司会に渡辺浩氏という、東京における最強メンバーを揃えることができた。ご存知の通り、坂部氏はドイツ哲学研究者というだけでなく、世阿弥など日本の伝統思想に対しても造詣が深い。馬淵氏は儒教（陽明学）研究から始めて道教・仏教に順次その触手を拡げて活躍中である。そして、渡辺氏が江戸儒学を主要研究対象としつつも、単なる日本思想史の枠組みに収まらない問題関心と叙述の幅を持っていることは言うまでもない。ちなみに、渡辺氏には、東京大学副学長という要職を一年八か月務めたあとの、いわば学界復帰最初の仕事として司会を引き受けていただいた。

シンポジウム当日は約百名の来会者を得、島菌拠点リーダーの開会挨拶に続いて杜・小島・坂部・馬淵の順で登壇した。なお、杜氏にはこの日は英語で話してもらい、日本語への同時通訳が付けられた。

杜氏は最初に用意した〈生〉についての講演原稿を離れて、むしろ〈死〉の問題と深く関わる儒教の世界観を語った。これは今回の来日期間を通じて、小島と何度かこのシンポジウムについて議論し、小島が自分の報告の意義について説明・注釈したことに対する、杜氏の応答という側面も持っていたように思う。小島が発表において三島由紀夫における陽明学の問題を扱い、そのなかで蒋介石の陽明学理解に言及すると、杜氏は当初

予定されていなかった形で特に発言を求め、氏の問題に対する解釈を述べた。二人の論点のズレは今ここで詳細には述べない——後掲の小島論文でも触れていない——が、陽明学が歴史的に近現代東アジアで果たした、ある種の政治的役割にかかわることであり、いづれ別のところで整理しなおしたうえで論じたい（講談社選書メチエより近刊予定の拙著『近代日本と水戸学・陽明学』（仮題）参照）。

坂部氏は杜氏が事前に用意していた原稿内容をふまえて、それを西欧思想の流れから再照射し、〈近代〉の特異性、とりわけそれを（小島が指摘したように）ドイツ・プロテスタンティズム系統の哲学思想の枠組みで移入した日本近代の問題として捉えることの重要性を述べた。馬淵氏は、〈死〉を非日常のこととしてそれ自体の問題として語らない儒教のなかにあっても、生前の満足として死を迎えるしかない朱子学的系統と悟り体験を有している陽明学的系統との差異を指摘し、それでも他者の〈死〉に対して機能不全状況に陥ってしまうために仏教・道教への社会的需要が存続しつづけたのだらうと論じた。当日はそのあと、パネリスト同士の応酬、フロアからの発言、さらには司会の渡辺氏からの問題提示もあつて活発なやりとりがなされた。

以下に収録するのは、杜氏が最初に用意して当日シンポジウム会場で配布された原稿（日本語としてはその後一部改訳）と、当日の口頭発表に対応する形で杜氏が後日書き下ろした原稿の邦訳、それに小島の報告原稿（ほぼ原型のまま）との三本である。これが一過性の企画でなく、「死生学の構築」における構成要素として有意義に展開させていけるかどうか、はなはだ心許ないところであるけれども、儒教のみならず仏教や道教、それに（日本の神道も源流はその系譜に属するという学説のある）汎神論的な民俗信仰をも包含した形での、〈東アジアの生死観〉の伝統を解説・整理しておくことは、わたしたち自身の将来的課題として避けて通れない。

い、喫緊のテーマであるように思われる。

(こじま・つよし 東京大学大学院人文社会系研究科助教)